

お正月も過ぎ、一月も半ばとなりました。

ねんまつ としはじめ 年 末や年 始に、お寺や神社で御祈禱ごきとうを受けられた方もいらっしゃる事でしょう。御祈禱では、太鼓たいこの音がなんとも言えない雰囲気をつくりだします。

この太鼓、お寺ではさまざまな場面で鳴らされます。その種類と用途もさまざまで、大きな太鼓は掃除や食事、お茶などの生活での合図や時刻を知らせるのに用います。また、御祈禱などの法要でも用いられます。片手で持てるくらいのおおきさの太鼓もあり、先祖供養やご葬儀などでハツというシンバルのようなものとともに鳴らされます。

現在の供養や葬儀で使われる太鼓をはじめとする鳴らし物ですが、お釈迦さまがお亡くなりになられた際こじの故事にちなんでいます。

お釈迦さまが病 重やまいく死期をさとり、クシナガラあいだのサーラ樹の間に頭を北に向けて横たわると、そのサーラの花が満開になって降り注ぎ、天の花も降り注ぎ、天の楽器が奏でられ、天の合唱が起こったと仏典に記されており、お亡くなりになった際には、大地が震え、天の太鼓が鳴ったとあります。

この天の太鼓は、おそらくは雷であったのでしょう。

また、クシナガラの住民であるマウラ族がお釈迦さまのご遺体まもを護っている間や火葬ふに付す際、そしてご遺骨を祀る際に、舞まいや歌、音楽、花輪、香料をもって供養したと伝えられています。

その当時の楽器がどのようなものであったのかは定かではありませんが、インドの古い仏教彫刻の中に、太鼓や管楽器、ハープを奏でる様子があります。また、お経の中にも、天の太鼓のほかに「太鼓の音」という表現がありますので、太鼓はお釈迦さまの供養の際に他の楽器と共に奏でられていたと考えるのが妥当でしょう。

御祈禱など、法要儀式の中で鳴らされる太鼓の音も、古代インドのお釈迦さまの故事にはじまるという有り難さを感じながら、聴いてみてはいかがでしょうか。